

第3章 調査結果

A. 配布した見守りチェックシートの分析

1) 研究目的

前年度、本研究に協力して頂いた見守り関係者33人を対象として、見守りチェックシートの試行及び、試行後のアンケート調査を実施した。本章 I では、アンケート調査分析により、高齢者のセルフ・ネグレクトを防ぐ地域見守り組織のあり方及び、見守り活動において活用しやすい判断基準の検討を行うことを目的とした。

方法

- 1) 対象者:対象者は、前年度本研究に協力して頂いた見守り関係者 33 名(民生委員等)である。
- 2) 方法:高齢者虐待に関する研修会の場を活用して、見守りチェックシート(案)の使用説明を行い、チェックシートを配布した。回収は、地域包括支援センターに依頼した。
- 3) 時期:2009年 6月～7月
- 4) 見守りチェックシートの構成内容

(1) 基本編 12 項目と気になっていること(自由記載)および今後の対応

基本項目 1～12 の項目では、本人の状況、家族内関係、近隣関係について「はい」、「いいえ」、「わからない」の 3 件法で回答を求めた。「この方の気になっていること」については、自由回答とした。また、今後の対応については、「あいさつや声をかける」、「訪問したり、電話をかけて様子を見る」「地域包括支援センターに相談」、「その他」の 4 件法で回答を求めた。基本編の項目で 1 つでも「はい」に○がついた場合は詳細編 A をチェック、基本編 8 番の「はい」○がついた場合は詳細編 B をチェック、7～12 番の「はい」に 1 つでも○がついた場合は詳細編 C をチェックすることとした。

(2) 詳細編 A(観察と会話によるチェック項目) 15 項目

詳細編 A の項目では、1～12 番は、観察と会話によって本人の状況を把握する項目、13、14 番は、家族との関係についての項目、15 番は、うつ状態のスクリーニング項目

(3) 詳細編 B「うつ」状態の早期発見に関するチェック項目 5 項目

(4) C 認知症が疑われるサインに関する項目 15 項目および気になること(自由記載)

詳細編のチェック項目は、基本編 12 項目と同様に「はい」、「いいえ」、「わからない」の 3 件法で回答を求めた。

(5) 分析方法:見守りチェックシートの各項目について、単純集計および自由記載事項の検討を行った。

5) 倫理的配慮

本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。研究対象者に対しては、書面及び口頭で本研究の趣旨、目的と方法のほか、研究の途中でいつでも離脱できること、調査内容に関するプライバシーの保護の厳守等を説明し文書にて同意を得たとした。

2) 結果

1) 回収数: 見守りチェックシートを33人に配布し、33部回収した。そのうち、分析可能なチェックシートは26部(78.8%)であった。

2) 見守りの対象者

(1) 年齢

見守りを必要とする対象者の年齢は、80歳代の15人58%が最も多く、次いで70歳代の7人27%であった(図1)。

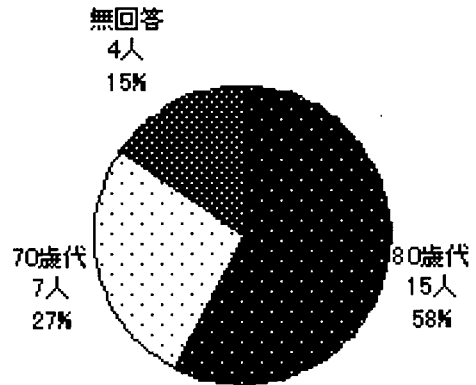


図1 見守りを必要とする人の年齢(n=26)

(2) 世帯の状況

見守りを必要とする対象者の世帯は、一人暮らしが22人85%と最も多かった。高齢夫婦世帯は4人15%であった(図2)。

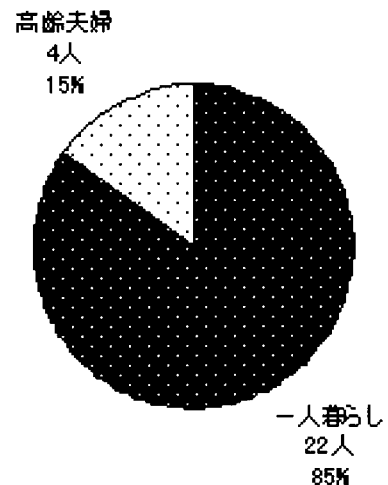


図2 見守り対象者の世帯の状況(n=26)

(3) 見守り対象者の身体不自由の有無

見守り対象者の身体不自由の有無については、「あり」と答えた人は、4人15%、「なし」と答えた人は、22人85%であった(図3)。

見守り対象者に身体不自由がある場合、具体的な身体不自由の内容としては、下肢不自由や視力障害といった内容がみられた(表1)。

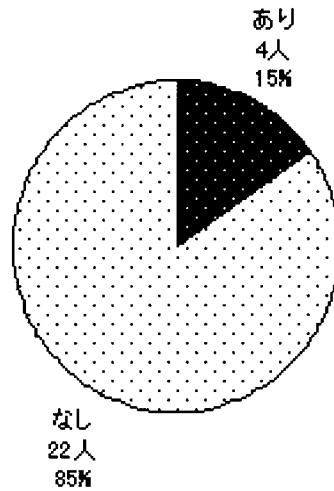


図3 見守り対象者の身体不自由の有無(n=26)

表1 見守り対象者の具体的な身体不自由の内容

下肢が不自由	4人
視力障害	1人

(4) 見守り対象者の緊急連絡先

見守り対象者の緊急連絡先の有無については、「あり」と答えた人は 11 人 42%、「なし」と答えた人は 2 人 8%、「わからない」と答えた人は 13 人 50%であった。(図 4)。

緊急連絡先については、「子」が 8 人 73%と最も多く、次いで親類 2 人 18%、兄弟 1 人 9%であった(図 5)。緊急連絡先の内訳は、息子・娘・弟であった。

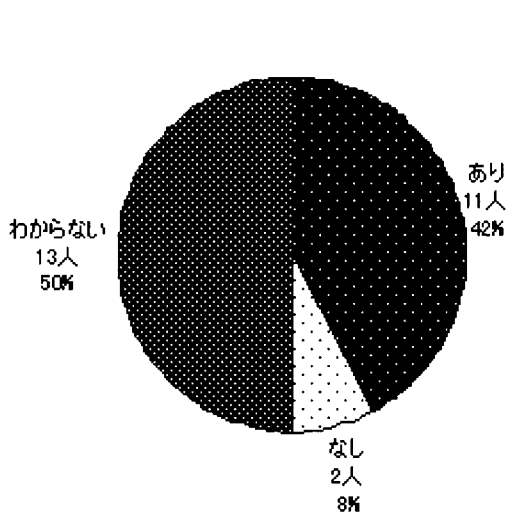


図4 見守り対象者の緊急連絡先の有無(n=26)

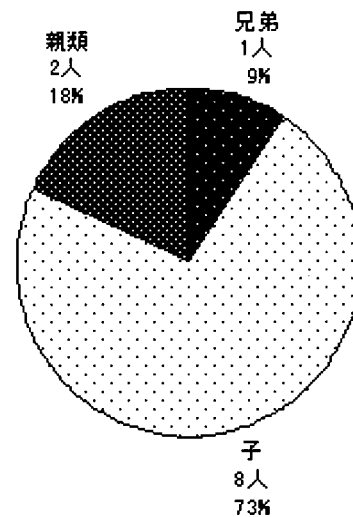


図5 見守り対象者の緊急連絡先(n=26)

3) 基本編チェック項目

見守りチェックシート基本編のチェック項目の回答結果は、表2のとおりである。各項目の詳細については、以下の内容であった。

全項目において、「はい」と答えた人は、いなかった。

表2 基本編チェック項目の回答内容(n=26)

項目	はい		いいえ		わからない		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ポストの郵便・新聞 雨戸閉まりっぱなし	0	0	26	100	0	0	26	100
家や家周囲の散らかり	0	0	24	92.3	2	7.7	26	100
家の明かりがつかない	0	0	26	100	0	0	26	100
通院している様子がない	0	0	22	84.6	4	15.4	26	100
怒鳴り声・泣き声、不自然な傷やあざ	0	0	24	92.3	2	7.7	26	100
最近姿を見ない、物音しない	0	0	24	92.3	2	7.7	26	100
不審者の出入り	0	0	22	84.6	4	15.4	26	100
無気力・無表情、意欲・生気なし	0	0	25	96.2	1	3.8	26	100
近所とのトラブル多い	0	0	23	88.5	3	11.5	26	100
服装が以前より乱れる	0	0	25	96.2	1	3.8	26	100
ガスや暖房など火の不始末増える	0	0	10	38.5	16	61.5	26	100
会話が通じにくい	0	0	25	96.2	1	3.8	26	100

「この方について気になっていること」については、「気になっていることがある」人は、8人 30.8%であった。「気になっていること」の具体的な内容は、表3のような意見がきかれた。

表3 基本編チェックシート 気になっていることの内容

閉じこもり傾向
転倒しやすい
夫が最近亡くなった
既往歴あり、悪化が心配
夫が入院中
孫が寄り付かないと、本人がさびしそうに訴える
高齢(79歳)だが、車やバイクを運転するので心配
他者との交流を避けている感じがする

チェックシート基本編記入後、「あなたはどのように対応したいと考えますか」との項目については、「普段どおり、あいさつや声かけ」が23人 88.5%と最も多く、次いで「訪問・電話」3人 11.5%であった(表4)

表4 今後の対応(n=26)

項目	人数(%)
普段どおり、あいさつや声かけ	23(88.5)
訪問・電話	3(11.5)
計	26(100)

4) 詳細編チェック項目

詳細編 B および C にチェックがついたシートは、なかった。

その他気になることについては、2人中が記載しており、内容は以下、表5のとおりである。

表5 その他気になっていること

息子が同居している場合、「見守り」の対象から除外されるが、その高齢者の方が「認知症では？」と思われる場面があり、息子さんにも「何か」問題があるように思われる。このような方に、どう対応すればよいのかと思う。

高齢夫婦のみの世帯で、妻ができないことを夫が代わってされている。妻がゆっくりならでも、夫がサッサと片付けているようで、妻もだんだん夫任せになってきている。

B. グループインタビュー調査

はじめに

平成20年度の研究報告(神戸市須磨区版)より、地域住民が行う高齢者のための見守り活動において、活用しやすい判断基準の整備が必要であることが明らかにされた。

そこで、平成21年度は、見守り判断基準作成の基礎的資料を得るために、神戸市須磨区の高齢者地域見守りネットワーク関係者(住民)を対象とした研修会を開催した。

研究者らは、そこで得られたデータを質的に分析し、具体的な見守り基準を作成するための枠組みを作成した。

なお、研究者らは、対象者が、セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)についてその重要性を再認識し、主体的に判断基準について検討できることを趣旨とした研修プログラムを作成し、グループインタビューの導入として活用した(表1)。

表1 第1回研修会の構成

時間	内容
10分	オリエンテーション
15分	DVD鑑賞「介護殺人:防げなかった親子心中」
25分	グループワーク1:話し合いと発表
35分	グループワーク2:話し合いと発表
25分	見守りチェックシートの使い方
10分	全体のまとめ

1) 研究目的・方法

目的

高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について検討し、見守り活動において活用しやすい見守り基準(判断基準)を作成することである。具体的目標は以下のとおりである。

- ①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方（特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等）について検討する。
- ②見守り活動において活用しやすい見守り基準（判断基準）を作成するための基礎的資料・枠組を得る。

方法

(1)対象者と方法

- ①本研究のデザインは質的帰納的研究である。
- ②対象者は下記のとおりである。
 - 1)神戸市須磨区の地域見守りネットワーク関係者（住民）33名
5～6人を1グループとし、全体を6グループに分け、グループごとに討議を行なった。討議内容を録音することに了解を得られたグループは、内容を録音したテープをもとに逐語録を作成した。録音に了解が得られなかったグループは会議録をもとに分析を行なった。
 - 2)社会福祉協議会職員1名・地域包括支援センター職員1名
- ③本研究では、目標にそったデータを収集するために、須磨区において2回の研修会を開催しグループインタビューを実施した。実施した2回の研修会は以下のとおりである。
 - 第1回研修会6月（研修プログラムの実施）ここでは主に、「セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方（特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見等）」について検討した。
 - 第2回研修会11月（見守りチェックシート試用後の意見交換）ここでは主に、「見守り活動において活用しやすい見守り基準（判断基準）」について検討した。

(2)分析方法

本研究における研究素材は、①対象者の発言やグループインタビュー内容を録音したテープとフィールドノート記録より作成した逐語記録、②対象者より提出されたチェックシート内容（自由記事項含む）であった。これらは、2回実施した研修会で得られた。具体的な分析方法としては、各研修のグループワークや全体発表での対象者の発言内容をICレコーダに録音し、録音した内容をフィールド記録と照らし合わせて逐語録に書き起し、文脈がわかるように記録した。その後、複数の研究者で、できるだけ対象者の表現を活用しコード化した。それらのコードをもとに、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化を進め分類を行った。

(3)倫理的配慮

研究対象となった参加者には第1回研修会時に書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、文書にて同意を得た。また、研究協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止が可能であること、研究目的以外では得られたデータは使用しないことを説明した。なお、本研究は甲南女子大学研究倫理委員会の承諾を得ている。

2)結果

1)研修会の内容と方法

(1)第1回研修会

第1回研修会の趣旨は、「セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方（特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等）」について検討することである。

第1回研修会のプログラムの流れは、表1のとおりであり、2時間で実施した。研修プログラムの構成は、介護負担が大きな原因となって起きた親子心中（息子と高齢の母親）事件をテーマとしたDVDを視聴した後のグループワーク（第1部）と、見守りチェックシート試用についての説明（第2部）から構成されている。

研修会第1部のグループワークの内容は、表2に示す。グループワークではまず、「DVDで示した事例がなぜ周囲の人に助けを求められなかったのか」について検討した。次に、「隣人グループ

と見守りグループの立場に分かれ、事例が隣人であったらどうするか、見守りグループであったらどうするか」についてそれぞれの立場から話し合ってもらった後全体発表を行った。なお研究者は、グループの発言が活発に表出されるようファシリテーター役を務めた。

研修会第2部では、本研究班で試験的に作成した見守りチェックシート基本編の活用方法について対象者に説明し、近隣の高齢者の生活状況をチェックシートにそって把握してもらい、7月末までに地区民生委員長さんまで提出してもらうよう依頼した。見守りチェックシート基本編は12項目のチェック項目から構成され、住民自身が該当する高齢者への対応として、「普段どおり、挨拶や声かける」「訪問したり、電話をかけて様子を見る」、「地域包括支援センターに相談する」などの中から選んでもらうことにした。

なお、見守りチェックシート基本編の使い方については、住民の理解を促すために、模擬事例を示し、説明時に見守りチェックシートの各項目にあてはまると考えられる部分を住民とともに確認した。

表2 第1回研修会グループワーク内容

<p>「介護殺人：防げなかった親子心中」の紹介</p>	<p>父親が亡くなって10年あまり、一人息子のK被告は工場働きながら、一人で献身的に母親の介護に努めていました。近所の方は、母親の手を引いて散歩する姿や、一緒に買い物する姿、おむつを抱えて買い物するK被告の姿をよく見かけていました。</p> <p>ある日、母親が急に倒れ緊急入院後、認知症が進行し、退院してから母親が徘徊することが多くなりました。K被告は仕事中でも、母親を保護した警察から呼び出されることもしばしばありました。</p> <p>しかし近所の方は、K被告が困っていることを全く知りませんでした。K被告の母親は、地域の民生委員の支援対象に入っておらず、民生委員が関わることもありませんでした。</p> <p>介護保険サービスを利用するにも経済的に苦しく、K被告は認知症の母親の介護で一睡もできないことが続きました。介護に追われ仕事ができなくなりましたが、生活保護の申請相談では十分な対応をしてもらえず、K被告は申請ができないと思い込んだ後、家賃が払えず食べるものもなくなり、母親との心を決心しました。</p> <p style="text-align: center;">NHK クローズアップゲンダイ 「防げなかった悲劇」(2006年6月28日放送より)</p>
<p>グループワーク1</p>	<p>なぜK被告は、周囲の人に助けを求められなかったのでしょうか。 K被告の気持ちを考えてみましょう。(10分)</p>
<p>グループワーク2</p>	<p>須磨区にK被告が暮らしていたら、どのように関わりますか？ 「K被告の隣人」または「地域の見守りネットワークメンバー」の立場でどうしたらよかったのか、どんなことができるのかを考えてみましょう。(15分)</p> <p>① 立場その1:隣人グループ もしあなたがK被告の隣人だったらどうしますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 緊急時どうしますか。 ・ 普段はどうしますか。 ・ 地域でどのような取り組みをしたら良いでしょうか。 <p>② 立場その2:見守りグループ もしあなたがK被告の地域の見守りネットワークメンバーだったらどうしますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 緊急時どうしますか。 ・ 普段はどうしますか。 ・ 地域でどのような取り組みをしたら良いでしょうか。

(2)第 2 回研修会

第 2 回研修会は、第 1 回研修会で依頼したチェックシートの試用期間後(平成 21 年 11 月)に実施した。

対象者は、第 1 回研修会に参加しチェックシート試用に協力いただいた対象者である。

第 2 回研修会の趣旨は、試用したチェックシート活用体験に基づき、「見守り活動において活用しやすい見守り基準(判断基準)」について検討することであった。

はじめに研究者から、第 1 回研修会で配布した見守りチェックシートの回収状況や集計結果の概要説明及び、11 月に須磨区で実施した高齢者虐待防止講演会に出席されていた数名の方から、研修会で印象に残った内容の報告や感想等を出していただき意見交換を行った。次に、協力者から、チェックシートを用いて支援した見守り対象者の状況や支援プロセス、試用後の感想(改善点やアイデア含む)等を話し合うためにグループワークを実施した。第 1 回研修会と同様、全体で発表を行い、研究者がファシリテータ役を務めた。

2) 第 1 回研修会におけるグループインタビュー等の分析結果

対象者は、DVD の事例に関する意見や感想の中で、単に他の地域で発生した事件として捉えるのではなく、身近なところ(須磨区)で生じた際にどのように対処するかについて都市部との比較を行いながら活発な検討がされた。

以下、DVD 事例に対するグループワークの結果を報告する。

①「なぜK被告は周囲の人に助けを求められなかったのか」については、11 サブカテゴリー、3 カテゴリーに分類された。(表4)

【男性介護者の問題】

このカテゴリーは、男性介護者が一人で高齢の実母を介護する上での諸問題についてである。サブカテゴリー《介護知識・技術の不足》《男性介護者の考え方や意識》《支援対象に入らない》《支援者側の気兼ね》で構成されていた。本件は、認知症の母親の介護のため仕事を辞めた息子が一人で介護を続け、ついには親子心中を選択せざるを得なかった悲惨な事例であった。

【経済的困窮の要因】

このカテゴリーは、仕事を辞め収入が断たれ、ついには食べることに事欠く経済的困窮の要因についてである。サブカテゴリー《会社からの支援が得られない》《生活保護申請上の問題》《外部からの状況把握が困難》で構成されていた。

【地域との関係性】

このカテゴリーは、危機的状況に陥っているにもかかわらず、周囲に助けを求めることができず心中を選んだ親子と地域の関係性である。サブカテゴリー《地域との交流が希薄》《周囲の意識が低い》《行政や専門職の対応のまずさ》《見守り組織が機能していない》で構成されていた。

表4 第1回研修会グループワークにおける対象者の意見
「なぜK被告は、周囲の人に助けを求められなかったのか」

【男性介護者の問題】	
《介護知識・技術の不足》	母親の病状に対する理解や知識が不足していた 介護の基本的な技術や知識に関する情報が得られなかった 利用できるサービスが活用できていない
《男性介護者の考え方や意識》	まじめな性格、責任感が強い 自分でなんとかしないとの思いが強い 独りで抱え込む この年代の特徴かもしれない 弱音を吐く相手がいなかった 自分の思い通りにやりたい 母親への感謝の気持ちがある 老いる母親を受け入れるのが辛い
《支援対象にかからない》	近所は、息子が世話をしていることで安心していた 高齢者の一人暮らしでないの支援対象に入らなかった 壮年期男性介護者だと見守り対象に入りくい
《支援者側の気兼ね》	女性の隣人だと男性介護者宅に立ち寄りにくい 立ち入ったことはかえって迷惑でないかと気兼ね 家事の話題なども男性介護者にはしにくい
【経済的困窮の要因】	
《会社からの支援が得られない》	大企業でもない限り介護休暇等福利厚生も整っていない 離職後、介護しながらの再就職は困難 会社の同僚等にも相談できなかった
《生活保護申請上の問題》	働いている時に申請に行っても断られる 家を処分したり、貯金が底をついてからの申請では遅いゼロ になってから相談しては無理がある 状況を伝える民生員などの橋渡しが必要だった
《外部からの状況把握が困難》	経済的問題は第三者にはわかりにくい どこにどう相談してよいのわからなかったのでは
【地域との関係性】	
《地域との交流が希薄》	会社勤めであったから近隣とのつきあいがなかった 母親も身体的や経済的なことで外出もできなかったのでは
《周囲の意識が低い》	めったに見かけないと存在が薄らぐ 周囲からの声かけもしにくかった アパートの隣人の意識が低かった 周囲の者も自分の生活維持で見守るゆとりがなかった
《行政や専門職の対応のま ずさ》	経済的支援があれば心中を防げた ケアマネにきちんと状況を伝え相談できなかった 生活保護の窓口で保護の対象外と判断されてしまった 専門職間での連携が上手くできてなかった 地域の民生委員が橋渡しできたらよかった
《見守り組織が機能してい ない》	神戸市のような見守り組織がない 気軽に相談できる専門職がそばにいなかった 見守り組織の支援対象になっていなかった

上記、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、右枠内は素データである。なお、素データは、代表的なものを示している。

②「隣人であればどのように対応したか」については、9 サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。(表5)

【日頃のつきあい】

このカテゴリーは、K氏親子と近隣の日頃のつきあいの状況である。サブカテゴリー《近所同士気軽に声かけ合う》《地区組織を活用して見守る》《昔ながらのつきあいを大切にする》《転入者とのかわり合いが難しい》で構成されていた。

【緊急時の対応】

このカテゴリーは、K氏親子が隣人であったならば、緊急時には近隣としてどのように対応するかである。サブカテゴリー《民生委員や包括支援センターに相談する》で構成されていた。

【近所としてかかわる限界】

このカテゴリーは、K氏親子が隣人であり、かかわる上での限界である。サブカテゴリー《男性介護者にはかかわりにくい》《経済面の把握は困難》《拒否されないかと躊躇する》《見守り後継者の不足》で構成されていた。

表5 第1回研修会グループワークにおける対象者の意見
「隣人であればどのように対応したか」

【日頃のつきあい】	
《近所同士気軽に声かけ合う》	日頃のつきあいが一番大事 日頃顔をあわせたら挨拶する
《地域の見守り組織へつなげる》	ひまわりグループと協力して見守る 子育て世代やPTAの協力を求める 防災組織や自治会でも見守る 犬の散歩仲間などでも地域の見守りができる
《団地内の見守りに工夫する》	回覧を回す際に同時に様子をうかがう 昼間一人になる高齢者に気をくばる 団地や町内の行事に誘う
《転入者との関わりが難しい》	転入者が多く情報把握が難しい 干渉されるのを好まない人もいる 転入者には意識して挨拶する
【緊急時対応】	
《民生委員や包括支援センターに相談する》	民生委員やセンターに連絡する 緊急の場合は、その家に訪問してもらうよう依頼する 普段から声かけして信頼関係をつくる必要がある
【近所として関わる事の限界】	
《(男性介護者にはかかわりにくい》	男性介護者には話しにくい 男性介護者に対しては家庭内の状況は話題にしにくい 男性協力が欲しい
《経済面の把握は困難》	心配な面に気づいたら民生委員に相談 個人情報なので立ち入りにくい問題
《拒否されないかと躊躇する》	相手方から相談もないのに立ち入ることに躊躇する 男性介護者は女性よりも交流がなくても良いと考えていると思う
《見守り後継者の不足》	見守り活動状況に地域内での格差がある 若い世代は働きに出ているので見守り活動の時間がない 民生委員の高齢化や後継者不足 リーダーとなる人材発掘

上記、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、右枠内は素データである。なお、素データは、代表的なものを示している。

③「見守りメンバーであればどのように対応したか」については、11 サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。(表6)

【男性介護者へのかかわり方】

このカテゴリーは、女性メンバーで構成された見守り活動グループが男性介護者への関わり方で工夫していることなどである。サブカテゴリー《日頃から信頼関係を築く》《男性介護者への配慮を考える》《母親の状況を把握する》《見守りのための訪問をする》で構成されていた。

【地域の保健福祉資源との連携】

このカテゴリーは、K 氏親子のような対象を地域で支援してゆくために見守りメンバーが地域の保健福祉資源とどのように連携をとるのかについてである。サブカテゴリー《メンバー間や民生委員と連携する》《地域包括支援センターへ協力を求める》《役場の関係課へつなげる》《警察・消防署との連携》で構成されていた。

【地域での組織的な見守り体制】

このカテゴリーは、地域での組織的な見守り体制である。サブカテゴリー《地域の見守りネットワークを活用する》《高齢者の生活圏での見守り》《見守り基準を活用する》で構成されていた。

表6 第1回研修会グループワークにおける対象者の意見
「見守りメンバーであればどのように対応したか」

【男性介護者へのかかわり方】	
《日頃から信頼関係を築く》	日頃からの信頼関係をつくる 拒否されても気長に対応する 日常の挨拶を心がける
《男性介護者への配慮を考える》	男性の民生委員が対応する 男性介護者のサロンをつくる 地域で男性の見守りボランティアをみつける 社会福祉協議会等で団塊世代の男性介護者を支援する 会社勤めの段階から将来の介護について考えておく
《母親の状況を把握する》	母親と面接する機会をつくり心身の状況を把握する 専門職と協力し健康面の観察をする
《見守りのための訪問をする》	できるだけ訪問で様子をうかがう 団地やマンションでは拒否された場合も、外から状況を観察する
【地域の保健福祉資源との連携】	
《メンバー間や民生委員と連携する》	民生委員と日頃から連携をとって支援している 見守りメンバーの定例会等で情報を共有する 必要な際は民生委員と一緒に活動する 見守り活動を地域へ発信し住民間の理解協力得る
《地域包括支援センターへ協力を求める》	センターの保健師や社会福祉士に相談する 緊急の際や対応が困難な際は専門職に伝える 必要な場合は同伴で訪問してもらう 専門職に病状の観察や医療的対応を判断してもらう
《役場の関係課につなげる》	福祉サービス等の申請手続きを検討してもらう 他の専門機関への紹介を検討してもらう
《警察・消防署との連携》	見守りネットワークのメンバーとして協力してもらう

【地域での組織的な見守り体制】	
《地域の見守りネットワークを活用する》	包括支援センターが相談の窓口となる 見守り推進委員と協力して支援できる 民生委員や友愛ボランティア間で連携がとれている 地域見守り活動に必要な知識や情報の提供がされている 区役所(あんしんすこやか係)が対応してくれる
《高齢者の生活圏での見守り》	商店街や公共施設・金融機関・警察・医療機関等様々な生活場面の関係者らで見守るまちづくりの視点が大切 組織間の交流の場が必要 専門職間のネットワーク組織を強化する 社会福祉協議会とボランティアの連携 高齢者の実態調査の実施で状況を把握する
《見守り基準を活用する》	見落としとしてはいけない観察面に注意して見守る どのような場合に専門職に連絡するか頭に入れておく 住民ボランティアが活用しやすい基準が必要

上記、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、右枠内は素データである。なお、素データは、代表的なものを示している。

3)第2回研修会プロセス

本研修会の趣旨は、見守り活動において活用しやすい見守り基準(判断基準の整備)について検討することであった。チェックシート試用後に対象者から出た意見の主な内容を抜粋したものを表7に示す。

表7 チェックシートを試用しての意見・感想

利点
見守りの際に見落としはならない項目がわかり便利
見守りメンバー間で必要な視点が共有できるので、情報交換の際深い検討ができる
日頃自分がどの程度対象者を把握しているかがわかる
次回の活動計画の参考になる
欠点
項目が多すぎて使いづらいのもう少し絞ってほしい
判断に迷う表現がある
日頃の信頼関係が深まらないと観察できない項目が多い
「うつ」の早期発見の質問項目は、直接聞きとることは難しい。上手な質問の仕方を知りたい。

第2回研修会のグループワークでは、約1ヶ月間チェックシートを試用し、シートの構成内容や、実用性等についての具体的なアイデアや意見、感想が発表された。

なお、今回提出されたチェックシートの記述内容から、緊急性を要する事例は含まれていない。(いずれも、見守りメンバーらにより継続しているケースに対して試用)

今回のグループワークでは、チェックシートの今後の活用方法の例も明らかにされた。たとえば、見守りメンバーによって早期発見されたハイリスクや専門職の支援が必要なケースの状況を的確に、その地域の地域包括支援センター(見守り推進員等)に連絡相談する際のツールとしても活用できることがその一例である。

第4章 まとめ・提言

本年度の研究目的は、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について検討し、見守り活動において活用しやすい見守り基準(判断基準)を作成することであった。具体的には、①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)について検討する。②見守り活動において活用しやすい見守り基準(判断基準)を作成するための基礎的資料・枠組を得る。この2点であった。

本章では、見守りチェックシート試用後の調査結果の分析および、研修プログラム実施(グループインタビュー含む)結果より明らかとなったことおよび、提言を箇条書きにする。

1. 見守りチェックシート試用後の調査結果の分析

1) 本チェックシートを活用した見守りの対象者について

現状

- ① 須磨区では、高齢者虐待に関する住民意識も高まってきている。地域見守り組織の特徴としては、あんしんすこやかセンターに配属されている見守り推進員と地域の友愛訪問グループメンバーや民生児童委員、保健師らが連携をとり積極的な活動が行われている。
- ② 今回チェックシート試用の見守り対象者についてみると、最も多かった年代は、80歳代が15人(58%)と過半数を超えていた。世帯別で見ると一人暮らし高齢者が22人(85%)となっている。須磨区では震災後の復興住宅(マンション)に住む一人暮らし高齢者も多い。須磨区の見守り活動においては、室内の状況が把握しづらいという住宅の構造面の問題も抱えている。
- ③ 見守り対象者に身体不自由のある場合、下肢不自由が多かった。坂道や段差が多い環境であったり、高層住宅に居住していたりする場合、閉じこもりがちになることもあるので注意が必要である。
- ④ 今回提出されたチェックシートでは、緊急連絡先不明が13人(50%)と最も多く、連絡先がないが2人(8%)であった。連絡先の内訳は、息子や娘で7割を占めているが、区外や県外等遠隔地の場合も多い。緊急連絡先不明の中には、見守り初期段階のため対象者と見守りメンバーとの信頼関係がまだ十分に築けていないものも含まれている。しかし、多くは、家族関係の希薄等で支援が受けられない高齢者である。

課題

- ① 見守り対象のハイリスクとなる「後期高齢者・一人暮らし・緊急連絡が困難」な方に関しては、日頃から地域包括支援センターの見守り推進員や民生児童委員と見守りメンバー間での情報の共有化や、緊急時の連絡網等の整備をしておく必要がある。須磨区では、見守りメンバーと民生児童委員等との定期的な交流や学習会の機会を設けているので、そういった機会を活用して、相互の情報交換や、支援のための連携をより強化する必要がある。
- ② 須磨区のいくつかの地区では、見守りメンバーらが主催する行事(お花見等)へ閉じこもりがちな高齢者への参加を促している。今後は、男性の参加者や、男性の介護ボランティアも開拓することが課題となっている。男性ボランティアであれば、男性の得意や関心分野での役割(例:車での送迎、買い出し等)を担ってもらえるような工夫が必要である。
- ③ 「緊急連絡先不明」の背景や対象者の内面を把握する姿勢が大切である。緊急連絡先を得られない背景にある家族との関係性や、本人の心情を考慮した個別的な支援計画が必要となる。行政からの実態調査による把握も重要である。

2) 基本編チェック項目から明らかになったこと

現状

- ①基本編の中で「この方について気になっていること」の内容を分析しカテゴリー化すると、《近隣関係が希薄》《転倒の危険》《病状の悪化》《夫の死や入院》《高齢者の運転が心配》が抽出された。
- ②これらに対して今後どうしますかに関しては、とりあえず現状を見守るや普段どおり声かけてゆくが23人(88.5%)と9割近であった。

課題

- ①特に、病状の悪化(病変)や転倒の危険などは、通院状況等治療状況の把握や、はやめに見守り推進員等専門職との連携が必要である。
- ②今回提出いただいたシートの対象者は、以前からゆるやかな見守りを継続している対象者が多かったため、追跡の必要な事例はみられなかった。しかし今後本シートを活用していく上では、地域包括支援センターや在宅ケア機関や行政がかかわっていない事例も出てくることが予測される。これらのことから、関係機関の専門職は、見守りメンバーからの情報を受けた場合、訪問調査を行うなどし適切な支援につなげることが必要である。

3) その他気になることから明らかになったこと

現状

- ①「息子が同居している場合、見守りの対象から除外されるが、その高齢者の方が「認知症では？」と思われる場面があり、また、息子さんにも「何か問題があるように思われる」といった、多問題が潜在しているような事例に直面していた。
- ②「夫が妻を介護している高齢世帯で夫の介護方法が心配。妻がゆっくり時間をかければできることでも、夫がサッサと片づけているため、妻もだんだん夫任せとなってしまう。」

課題

- ①ハイリスク高齢世帯の早期発見と継続的な支援は、専門職と住民による見守り活動の重層的支援が必要である。上記①のような事例であれば、専門職による状況把握や関係者によるケア会議等を適切な時期に行い介入を検討する必要がある。介護者や同居者の健康面のアセスメント(精神症状も含め)も重要であり、状況に応じて治療や福祉サービスにつなげることが必要となる。
- ②須磨区では社会福祉協議会や住民組織による、男性介護者を対象とした交流会や料理教室にも取り組みは始めている。今後の課題の一つとして、男性ボランティアの育成がある。前述したとおり、男性の特技や関心を生かした役割を工夫することも必要となる。
また、近年は都市部では、オレオレ詐欺等高齢者をねらう犯罪が増加している。今後の見守り活動の中でこうした防犯対策も意識する必要がある。

2. 研修プログラムの実施結果と課題

1) 男性介護者への支援の現状と課題

- ・第1回研修会では、男性介護者が実母と介護心中に至った事例についてDVDで視聴し研究者らで構成したプログラムに沿ったグループワークを行った。今回のグループワークではまず、男性介護者の考え方や意識を把握した上で、地域で支援する際の留意点や課題について検討した。
- ・男性介護者一般に観察される共通点が以下のとおり指摘された。①男性介護者(夫または息子)は、まじめな性格の者が多く献身的に介護する。②要介護状態にある女性(後期高齢者でありかつ、認知症やねたきりなど何らかの障害を持っている)を介護している。③他人に頼ろうとせず、孤立的な状況で介護を続けている傾向にある。④家事はにがて、つらいと思い、どこまでやり通せるか不安を感じている。
- ・さらに、上記のような特徴を持つ男性介護者に対して、見守り活動等へのためらいや遠慮などの意識を変革し、利用を促進していくことが必要であることを再確認できた。
- ・今回のような悲惨な事件の背景には「介護疲れ」がある。グループインタビューの分析結果からも加害者(本事例ではK氏)は、まじめな性格が多く、介護を独りで担っており、心身共に介護負担が積み重なった結果として本事件が発生している。
- ・グループワークの検討から、男性介護者への日頃からのサポートが必要であること、地域の中での孤立を防ぐことが重要であること、住民による支援の限界を見極め、ハイリスク高齢世帯の早期発見には特に専門職と住民ボランティアの重層的支援が必要であることなどが示唆された。
- ・さらに、対応策として、女性中心で構成されている現在の見守りボランティアに男性の協力を求める方策や、社会福祉協議会を中心とした男性介護者の集いの企画、見守り対象に入りにくい(今回のK氏の事例のような)世帯を把握するための見守り判断基準の活用といった提案がされた。いずれも日頃の見守り活動体験を通して出された具体的提案内容であった。

2) 経済的虐待や経済的困窮の早期発見・早期対応の状況と課題

- ・次に、経済的困窮状態に焦点があてられた。
- ・本事例においてK氏が明日の食べるものにも事欠く困窮状態となり事件が発生するまでを客観的に見ると、回避できる可能性はゼロであったのだろうか。グループワークでは、経済的困窮の要因について、社会的側面とK氏の内面から検討した。多く出た意見は、K氏の経済的状態の把握の難しさや、生活保護申請手続き上の問題点の指摘であった。
- ・さらに、K氏が退職する以前からある程度将来予測して必要なサービスの利用や、生活保護申請に向けての準備が必要であったとの意見も出された。
- ・また、今日の社会情勢からすると、離職や解雇されたり、長らくニートや閉じこもり状態であった息子がある時点から、母親等の介護者となるケースも少なくないと思われる。そうした男性介護者に、慣れない介護からくる身体的疲労や、経済的困窮が積み重なった場合、身体的虐待や傷害致死など悲惨な事件が発生する可能性もある。
- ・経済的状況は特に個人のプライバシーに深く関わる問題であるため、日頃からの交流や信頼関係が築けていないと介入が困難であることや、介護者(ここではK氏)との信頼関係を築く上で、彼にとって本当に負担になっている事柄は何かを見極めることが必要であることがグループワークでも検討された。
- ・特に就労していた息子が離職し慣れない介護をはじめ、介護に関する十分な知識や技術を持たないまま仕事場でのやり方を応用するような介護は長く継続することは困難である。そのうえ、日々認知症が進み、病状が悪化する母親を受容することが苦痛となるだろう。
- ・見守り活動の中で、経済的問題に触れる以前に、そのようなコミュニケーションが必要であるかもしれない。また、要介護状態の高齢者が権利として介護サービスを利用することができるということを伝えることも必要である。
- ・生活保護がナショナル・ミニマムの具体的基準である。しかしながら、K氏親子の例にもみられるよう

に、生活保護その他の社会保障・福祉制度を利用できず、その生存権が保障されない現実もある。地域見守りに関わる関係者が、生存権は、万人が無条件に保障される権利であることや、社会関係からの孤立や排除が、低所得層の健康悪化の要因となることを再認識することが大切である。

3. 今後の課題

- ・神戸市須磨区では、高齢者の健康指標の一つである要介護率等の改善もみられてきており、区内で継続して取り組んできた健康づくり活動や、高齢者の地域見守り活動が一定の成果をだしているところである。
- ・高齢者虐待防止法に基づく対応に関しても、あんしんすこやか係(須磨区役所・北須磨支所)、管内のあんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)、社会福祉協議会等連携強化により個別具体的な支援がされている。また、専門職(医師・弁護士・社会福祉士・保健師や看護師等・警察官)間で組織した高齢者虐待防止ネットワーク委員会が毎年企画する高齢者虐待防止講演会では、地域の見守り関係者らの積極的な参加があり、一般的な知識ではなく具体的な支援方法に関するテーマに高い関心が寄せられている。本年度の講演会では、本研究代表者から、見守り判断基準とチェックシート試用に関する紹介がされたところ、包括支援センターのスタッフや見守りボランティアグループから、見守りチェックシートの実用化に関する質問や意見が多く出された。
- ・次年度に向けた課題は、本年度各地で試用された結果を踏まえ、実用化に向けた修正と精度を加えることである。

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

高齢者等のセルフ・ネグレクト(自己放任)を防ぐ地域見守り組織のあり方
と見守り基準に関する研究

〈福井県勝山市〉

—平成21年度継続調査(2年目)報告—

目 次

研究組織	1
第1章 調査地区の概要	2
第2章 地域見守り組織の本年度の活動状況	5
第3章 高齢者見守り組織育成研修プログラムの実施と評価	8
第4章 まとめ	14

平成21年度 分担研究報告書《NO 7》

研究分担者 金谷志子

平成22(2010)年3月

研究組織

<本報告書作成者>

分担研究者:金谷志子 (大阪市立大学医学部看護学科 講師)

研究協力者:小尾智恵子(堺市南区役所地域福祉課 課長)

下熊京子(堺市南区地域包括支援センター 所長)

山崎知子(堺市南区地域包括支援センター 社会福祉士)

淡路深雪(堺市南区地域包括支援センター 社会福祉士)

山本美輪(明治国際医療大学看護学部看護学科 講師)

前原なおみ(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 助教)

研究組織構成メンバー

研究代表者:津村智恵子(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 学部長)

研究分担者:臼井キミカ(大阪市立大学大学院看護学研究科 教授)

河野あゆみ(大阪市立大学大学院看護学研究科 教授)

和泉 京子(大阪府立大学看護学部 准教授)

山本 美輪(明治国際医療大学看護学部看護学科 講師)

大井 美紀(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 准教授)

川井太加子(桃山学院大学社会福祉学部社会福祉学科 准教授)

金谷 志子(大阪市立大学大学院看護学研究科 講師)

栞田 聖子(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 助教)

上村 聡子(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 助手)

前原なおみ(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 助手)

鍛冶 葉子(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 助教)

第1章

1. 調査地区概要

1) 調査地区の状況

市町村名		福井県勝山市				
市町村の概要		勝山市は、福井県の東北部に位置し、市の中心は福井市の東方約28キロメートルの地点にある。市の周辺は1,000メートル級の山々に囲まれ、中心部は県下最大の河川である九頭竜川の中流域に位置している。市街地は九頭竜川の流れて沿って形成された河岸段丘に位置しており、明治以来の地場産業である繊維産業を中心とした商工業や古くから盛んな農林業を基幹産業とする。				
人口		人口 26,538 人、世帯数 8,282 世帯 (H22.2月現在)				
高齢化率		高齢化率 28.7% (H22.2月現在)				
調査地区の包括支援センターの専門職		勝山市地域包括支援センター 1箇所 保健師 2名、社会福祉士 1名、主任ケアマネージャー 1名、介護支援専門員 4名				
地区 (平成21年3月現在)	北谷地区	長山地区	立川地区	元町3丁目地区		
人口(人)	115人	760人	634人	731人		
高齢者人口(人)	70人	237人	187人	224人		
高齢化率(%)	60.9%	31.1%	29.5%	30.6%		
世帯数(世帯)	60世帯	276世帯	198世帯	212世帯		
1世帯あたりの人員	1.92人/世帯	2.75人/世帯	3.20人/世帯	3.45人/世帯		
地区の概況	勝山市の北東に位置し、市街地より約7kmの山間部にあり、県内でも降雪量の多い地域である。地区は7集落からなる。	勝山市の中央に位置し、市役所より2kmにある。地区内に病院や消防署がある。古くからの住宅が中心にあり、周辺に新興住宅がある。	勝山市の中央、西に九頭竜川が位置している。市役所より500mにある。古くからの住宅が中心にあり、周辺に新興住宅がある。	勝山市の中央に位置し、市役所より800mにある。古くからの住宅と、新興住宅が混在している。		
見守り組織数	1	1	なし	なし		
見守り活動の状況	見守り組織はないが住民同士が日常の中で互いに見守っていた。高齢化率が高く、高齢者同士の見守りの継続が課題である。	民生委員、地区ボランティアらによる地区の生きがいサロン活動が活発である。サロンをとおして地区の高齢者の状況を把握している。				

2) 勝山市の地図(図 1)

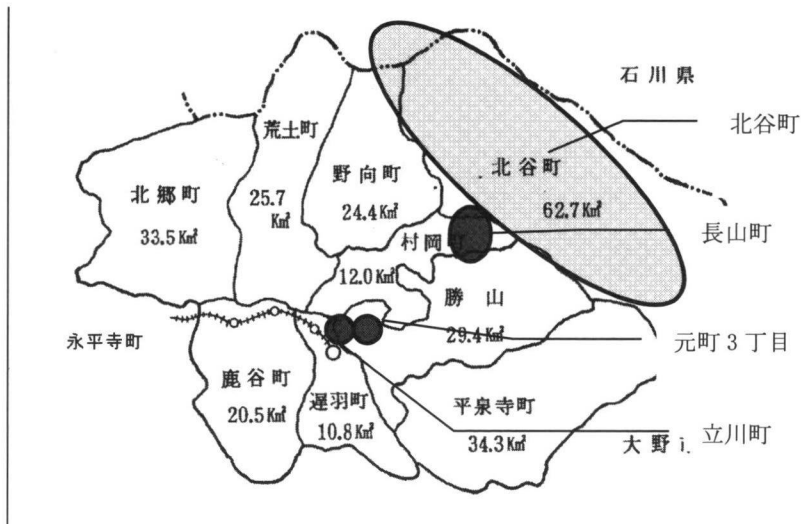


図 1 勝山市地図

3) 交通機関

調査地区の最寄り駅は、えちぜん鉄道 勝山駅である。見守り時の移動手段は、徒歩もしくは自家用車である。

4) 高齢者の組織(地域包括を中心とした連携を示す見守り組織図)

高齢者見守り活動の連携を図 2 に示した。

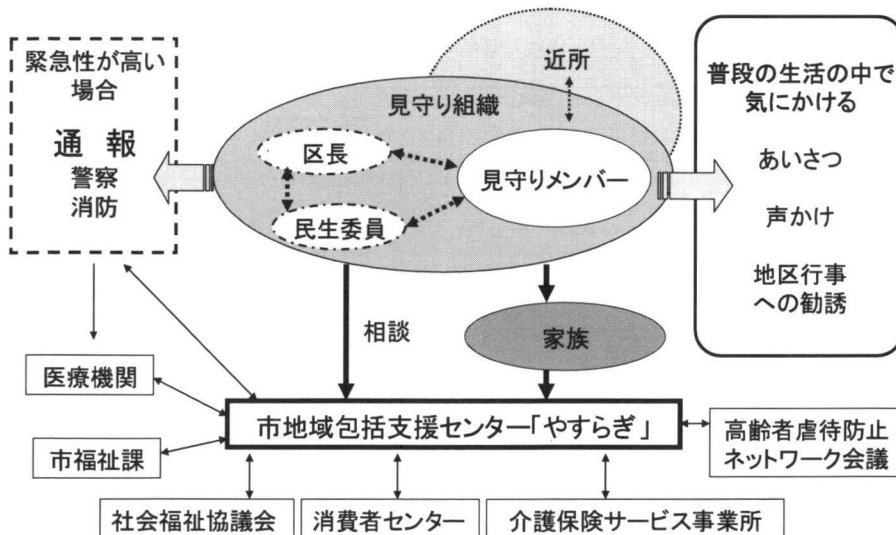


図 2 見守り活動の連携図